
日本人間関係学会ニュース 第91号 発行日:2017.10.30

News No.91 Japan Association of Human Relations October 30, 2017

発行：日本人間関係学会 広報委員会 E-mail: tanikawa@kusw.ac.jp 関西福祉大学 谷川和昭研究室
事務局：〒333-0831 埼玉県川口市木曽呂 1510 番地 埼玉学園大学人間学部心理学科 杉山雅宏研究室
FAX: 048-299-1111 E-mail:jahrjimukyoku@gmail.com

[内容] ☆理事長挨拶 ☆特集『人間関係ハンドブック』出版記念② ☆人間関係学探訪⑦ ☆事務局だより

《理事長挨拶》

第25回大会に寄せて

日本人間関係学会理事長 小山 望
(埼玉学園大学大学院教授)



「多様性に寛容な社会を目指して一人間関係力の向上のために一」をテーマとした、第25回全国大会がよいよ来月に迫りました。

勅使河原隆行先生が大会委員長を務められ、千葉県市川市にある千葉商科大学で開催されます。

私たちを取り巻く社会環境はマイノリティや異なる価値観を排除したり、自分とは違うものを中々受け入れられなかったりなど寛容性が乏しく、このままでは社会全体が委縮してしまうのではないかと危機感が募ります。今大会は、そんな社会の息苦しさを打開するためのヒントがたくさん詰まっています。まさに現代社会の抱えている問題が大会のテーマです。

本学会が目指す社会の形は、ソーシャル・インクルージョン（共生社会）です。しかし、地域社会に目を向けると、様々な価値観等による住民同士の分断があり、国内に住んでいる外国人や障がい者に対する差別などの問題もあります。共生社会の実現には、幼児期のインクルーシブ保育、学校教育機関におけるインクルーシブ教育、学校卒業後は、社会的弱者といわれる障がい者や高齢者、ひきこもりの若者などの雇用を可能にするためのソーシャルファームを増大させていくこと等が考えられます。

昨年の大会では大会委員長の谷川和昭先生

が、「地域で暮らし、地域で働く障がい者」と題した大会招待フォーラムを企画し、当事者の方の暮らしぶりや働いている様子を当事者自身のことばで報告してもらいました。地域でのソーシャル・インクルージョンの試みとして大変素晴らしいものであると感銘を受けた次第です。

今大会委員長の勅使河原先生は、優れたアイデアを持ち合わせた行動的な研究者です。大学のゼミに震災の復興支援活動を取り入れて実践するなど素晴らしい取り組みをしております。その支援活動の一つは原発の被災地域である福島県飯舘村、小林牧場へのバックアップです。被災後、千葉県山武郡に移転した小林牧場のソーセージやハンバーガーを千葉商科大学の学生食堂で販売することを試みています。その他の支援活動では、石巻市の水産加工業者と連携して「復興支援丼」も学生食堂で販売しています。勅使河原先生のアイデアが詰まった今大会はなにかサプライズが起こりそうで大変ワクワクします。

また国際的な学会活動の広がりも見えてきました。台湾国立中正大学の呉先生を招待して労働環境の問題で分断される人間関係についてご講演をいただく企画も興味深いです。これを機会に人間関係に関心をもつ台湾の研究者と本学会の会員との交流が深まることを期待しております。

最後になりましたが、多くの皆様の全国大会へのご参加を切に願っております。

特集『人間関係ハンドブック』出版記念②—編集責任者・分担執筆者のメッセージ



1993年の創設以来、25年目を迎える一般社団法人日本人間関係学会の研究成果の一端が、『人間関係ハンドブック』として2017年3月に福村出版から発刊の運びとなりました。今回の出版を受け、広報委員会では学会ニュースで特集を組むこととしました。特集は前号（第90号）と今号（第91号）の2回に分けることにしました。

前号では、本書の「目次・概要」の紹介と、本書生みの親である編集委員会の先生方から発刊前後におけるトピックやエピソードを寄せていただき、紹介を行いました。今号では、各章の編集責任者の先生方、そして分担執筆者の先生方よりメッセージをお寄せいただくことができましたので、紹介したいと思います。

なお、各章の編集責任者の先生方は、一部、編集委員会と掛け持ちされておられるため、ここでは重複を避けていることをお断りしておきます。

各章の編集責任者・概要

総頁280頁に及ぶ本書は、全9章で構成されています。各章の編集責任者*と概要は次のとおりです。

第1章 人間関係の基礎的諸理論 *早坂三郎・山本克司

人間関係に関する基礎理論や基本的人権、異文化、文学における人間関係について概説されています。

第2章 人間関係の心理 *杉山雅宏

自己理解や他者理解、対人関係の心理、家族・職場・地域の人間関係に関して、心理学的見解から概説されています。

第3章 人間関係の発達 *永野典詞

乳幼児から老年期までの人生のライフサイクルにともなう人間関係の心理について、発達心理学的見解から概説されています。

第4章 教育と人間関係 *占部慎一

学校教育の領域（就学前保育、小学校・中学校・高校・大学）における人間関係的な視点を取り上げ論述されています。

第5章 福祉・医療の分野における人間関係 *三好明夫・森千佐子

乳幼児から高齢者、障がい者などへの福祉的支援について、人間関係的な視点を取り上げ具体例に基づく論述を行う。また医療分野におけるさまざまな問題（がん、グリーフケア、ターミナルケア、アルコール依存など）の実践例を取り上げて、人間関係を中心とした支援について論述されています。

第6章 地域における支援活動 *田中康雄

地域社会におけるコミュニティづくり、地域における人間関係づくりの実践などを報告されています。

第7章 人間関係の改善に関するカウンセリング的アプローチ *小山望

心の問題や人間関係の修復・改善などに関するカウンセリング諸理論の紹介とともに、具体例をもとに実践や理論を報告されています。

第8章 被災地における人間関係のアプローチ *河合高鋭

東日本大震災の各被災地での人間関係づくりなどを含む学会員の支援活動の様子を、実践例をもとに報告されています。

第9章 人間関係士 *杉本太平

本学会の人間関係士の概要を現状と今後の展開を含め報告されています。

編集責任者・分担執筆者のメッセージ

埼玉学園大学教授・本学会事務局長

杉山雅宏先生（第2章 編集責任者）+++++

第2章「人間関係の心理」の部分のまとめ役をさせていただきました。内容としては、自己理解や他者理解、対人関係の心理、家族・職場、地域の人間関係に関して、心理学的見解から概説されています。

人は孤独になることを好みません。だから出会いを模索します。しかし、人がどこかで出会い、ふれあうことで何らかの摩擦が生じ、人間関係にひびが入ることがあります。そして、悩み苦しむのです。不思議なものです。身近な人間関係こそが要注意ということでしょうか。

出会いがあれば、必ず別れがある。必然的なことです。いずれそうなるにしても、お互いの配慮のなさから関係を壊すようなことはしたくないですね。いつもほどよい緊張感に包まれながら人と人とがふれあっていくことが大切なのかもしれません。

こうした当たり前のことも、この本の執筆を依頼され、改めて認識した次第です。一緒に2章をまとめた各先生方も同じような気持ちではないかと思います。

身近な人に配慮するということ。忘れがちなことでしたが、思いださせていただいた気がしております。

九州ルーテル学院大学教授・本学会常任理事

永野典詞先生（第3章 編集責任者）+++++

第3章は市川寛子先生、杉山雅宏先生、仲田勝美先生に執筆いただき、各先生の専門分野を丁寧に解説していただきました。人間関係の発達という、今まさにとても大切な課題について事例や理論を通じて、専門家だけでなく、保育、教育、福祉、心理の実務家、一般企業にお勤めの方々、主婦など、どなたにとってもわかりやすい内容となるように心がけました。人の育ちの一生を、人間関係の育ちの観点から、より良く生きる手立てを考えることができるとありがたいと考えています。

私は昨年、熊本地震を体験し人間関係の大切さと、同時にもろさを実感しました。多くの人々が、一人一人を大切に、他者を認め合う社会ができるといいなと思っています。そのためには、それぞれの発達期で人間関係を学び続けることの大切さを、お伝えできれば幸いです。

浦和大学准教授・本学会常任理事

田中康雄先生（第6章 編集責任者）+++++

学会の叡知として「人間関係ハンドブック」が出版されたことを本当に嬉しく思います。第6章は、6人の執筆者で、地域における支援活動を様々な観点から、具体例などを加えた実践的内容となっております。今回の執筆や編集作業を通して、地域での支援活動を行う際、いくら豊富な社会資源があっても、それを人につなげるためには、日頃からの地域住民同士の人間関係が重要であることをあらためて感じました。地域コミュニティの衰退が危惧される中、どのように地域の支援活動を行っていくかについては、現在、解決すべき課題の一つであると感じています。2017年7月に行政の講演会で、地域の高齢者の方々に対して、地域づくりをどのように考えていくのかについて話をいたしました。参加していただいた高齢者の方々に話を伺うと、地域づくりに関心はあるが、具体的行動まではいかないというコメントが多く聞かれました。そのため、ちゃんと「人間関係ハンドブック」の宣伝をした上で、具体的行動へ向けて背中を押させていただきました。「人間関係ハンドブック」を手にした方々が、地域における人間関係作りや支援活動に関心を持っていただければと思います。さらに、本学会にも入会していただけるきっかけとなり、新たな人間関係が構築できることを楽しみにしています。

鶴見大学短期大学部専任講師・本学会常任理事

河合高鋭一先生（第8章 編集責任者）+++++

この度、人間関係ハンドブック執筆にあたり、小山理事長、藤川先生、勅使河原先生、武井様のご担当部分をまとめさせていただきました。

東日本大震災から6年半が経とうとしていますが、被災者の方々の避難生活はまだ続いており、仮設住宅から高台移転が行われている現状で、日常を取り戻すことができない人も多くいます。本ハンドブック第8章にて、支援活動の一部を掲載させていただきました。日本人間関係学会支援活動委員会における支援活動も6年目となりますが、まだまだ困難な状況の中、住居や生活面での支援だけではなく、地域住民方同士のコミュニティ形成や心身のケアの重要性を復興への長い道のりの中に感じております。

宇都宮共和大学准教授・本学会関東地区会会長

杉本太平先生（第9章 編集責任者）+++++

日本人間関係学会では、かねてからの学会独自の認定資格創設の期待に応えるべく、佐藤啓子元会長の元で10年余の期間をかけて検討し、2012年1月に第1号の資格認定者を世に送り出すこととなりました。筆者自身は資格事業の準備からかわり、佐藤元会長から資格委員会を引き継ぎ、本学会の認定資格「人間関係士」の事業発展に努力いたしましたが、本章をまとめながら自身の力の至らなさを痛感した次第です。

「人間関係士」事業は学会の法人化に伴い、新たなステージに向けて進もうとしています。本章にも記述しましたが、「『人間関係士』として豊かな『人間関係力』を得た有為の人材が、それぞれの人間関係のフィールドでその力を活かし、社会の平和や発展に寄与できる人材として、また家庭や職場、身近な地域で傍に寄り添う人の支えになれる人として社会に貢献することで、平和で温かい人間関係が営まれるより良い社会の実現に寄与したい」と願い、今後もその発展に向けて力を尽す所存です。

日本医療科学大学教授・本学会理事

藤川君江先生（第8章第2節 分担執筆者）+++

元気な一人暮らし男性高齢者が暮らしている地域を探していたら、知り合いの管理栄養士から紹介して頂いたのが網地島との出会いです。2009年から一人暮らしの男性高齢者の生活調査をしてきました。もう8年網地島へ通っていると考えたら長いような短いような8年でした。今では島の人も顔見知りとなり、お茶のみに行ける家も増えました。何事も継続することが人間関係を良好にし、調査にも協力してもらえらることを島の人に教えて頂きました。

2011年の東日本大震災では甚大な被害を受けましたが、高齢者が多い島ですがみんなで協力して乗り越えた姿は感動しました。震災後から福島県の大学生に協力してもらい演奏会活動を行っています。高齢者は大学生の演奏を聴くと孫を見るような優しい眼差し演奏を聴いており、いつもと違う表情を見ることができます。大学生の演奏会を紹介したいと思っていましたが、紹介する場がありませんでした。今回、『人間関係ハンドブック』で紹介する機会を頂くことができ感謝しています。これからもこの島で暮らしている人を継続して訪問することが私の使命ではないかと思っています。これからも網地島で暮らす人の支援を考えて継続した訪問をしたいと思います。

東京理科大学教授

今村武先生（第1章第5節 分担執筆者）+++++

日本人間関係学会が総力を挙げ、学会員の研究成果を総覧する『人間関係ハンドブック』のささやかな一項目を担当することができまして、大変光栄に思っております。執筆致したのは「異文化交流」の欄です。しかしドイツ語教育を生業としているにもかかわらず、「さて何を書いたら良いものか」という難問にすぐに直面する有様であったことを（赤面しながら）ご報告する次第です。人間関係をキーワードに文学作品に改めて向かい合う、という作業はすでに数年前から行ってきました。それは学会におきましては「文学と人間関係部会」を場として行い、大学においては授業において実践してまいりました。そこで「部会」を率いている川村幸夫先生にもご相談し出した結論は、授業でも使える、また授業でも実践している内容からアプローチするという方向性でした。それが決まるとかなりスムーズに筆を進めることができました。煩瑣な作業を伴う編集作業をご担当くださいました先生方、監修の小山先生、早坂先生には、紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。

山梨県中央市立小学校教諭

山梨ロールプレイング研究会会長

福田聖子先生（第4章第2節 分担執筆者）++

占部慎一先生には大変お世話になりました。なかなか書けない私に、心配を超えてイライラされていたことと思いますが、長期にわたり常に温かい言葉で応援し励まして下さいました。先生に根気強く寄り添ってもらった体験で、他者への寄り添い方を改めて学んだ気がします。

今私は、占部先生からいただいた温かさを児童の指導や支援に生かしています。その児童達は他の児童への関わりに活かしています。職員室も同様です。占部先生の温かさが、我が校全体の人間関係づくりにつながって、毎日が温かくやる気に溢れています。

さて私は、論文の書き方に難儀しました。豊かな人間関係を築かせる実践はたくさんあるし、個や場に応じての関わり方もすぐできるのですが、論理的にまとめたり主軸を決めて書くことに戸惑いました。しかしそれらも、占部先生のご指導のおかげでなんとかクリア出来ました。その他たくさんの方々からもアドバイスを頂きました。心から感謝します。ありがとうございました。

高知大学准教授・本学会機関誌編集委員長

加藤誠之先生（第4章第4節 分担執筆者）+++

今回、私は藤田 毅先生（太平洋学園高等学校）との共著という形で、『人間関係学ハンドブック』第4章「教育と人間関係」第4節「高校における人間関係」を執筆させていただきました。

最近の我が国で、高等学校の位置付けは大きく変わりつつあります。高等学校は、制度上は義務教育ではないにもかかわらず事実上は義務教育になっており、中学生にとって、高校進学以外の進路はほとんど考えられなくなっております。そのため、高等学校も従来の適格者主義を乗り越え、すべての生徒に高校卒業までの学習を保障する必要に迫られています。

私は現任校の高知大学に赴任して以来、高知市の私立太平洋学園高等学校をフィールドとして、現実の高等学校でこうした実践を行うにはいかにすべきかを藤田先生と共に研究してきました。今回はその成果の一端を『人間関係学ハンドブック』という形で公表する機会を与えていただき、深く感謝しております。今後、人間関係士を取得する皆様にも、ぜひ高等学校の教育について関心をお持ちいただければと願う次第です。

江戸川大学総合福祉専門学校専任講師

福森高洋先生（第5章第9節、第7章第6節 分担執筆者）

私に与えていただいたお題は2つ。依存症のトピックと、さまざまあるカウンセリングの流派の一部の紹介です。私は臨床心理士です。また以前は精神科看護やPSW（精神科ソーシャルワーカー）も務めたことがあります。恐らくは、そうした私のキャリアと照らしてお題だったのでしょう。

お引き受けしたのはいいのですが、そのあとに悩むことになりました。いずれもすでに立派な成書がいくつもありますし、私の書ける範囲のことは何であろうかと。

しかし同時に嬉しい悩みでもあったのです。これまでの自分の生きてきた道のりが無駄なく生かされる機会を得たような喜びでした。

特にカウンセリングについての記述では力が入りました。師匠と仰ぐ神田橋條治先生、アーノルド・ミンデル、そしてミルトン・エリクソン。そのエッセンスの“ほんの一部の一部”しか紹介できませんでしたが、読者の皆さんが興奮してお読みになれるように工夫したつもりです。受け取っていただけたら、これほど嬉しいことはありません。

環太平洋大学東京キャリアセンター長・本学会理事

布施雅子先生（第4章第6節 分担執筆者）+++

人間関係を体系的に学べる『人間関係ハンドブック』は、基礎的理論から実践的活動を網羅するもので、人間関係形成における多様な他者の考えや立場の理解、役割を果たしながら他者と協力・協働して社会づくりをしていくためのヒントになるものです。私はキャリア教育・学生サポートに従事しておりますが、大学と企業を結びインターンシップを推奨する側から、本書ではインターンシップの在り方、意義について取り上げました。インターンシップは学修と社会経験を結び、学生はインターンシップを通じて働くことの意識や態度を養い、自らの学修を深め、新たな学習意欲を高める成長に繋がります。将来設計を考える有益な取組です。大学生の大多数が就職をする今日、企業が求める人材には「人間関係が円滑に築けるか」が大事な要素として判断されます。その証明として本学会の資格「人間関係士」が履歴書へ書ける証明の一助になることを期待します。学会25周年の節目に、私が「大学におけるキャリア教育」の執筆に関わりましたのも小山理事長、占部常任理事他諸先生方のためまいご尽力の賜物であり、ここに深く感謝するとともに厚く御礼申し上げます。

日本人間関係学会 創立25周年記念企画

人間関係に関する多種多様な 研究成果の集大成

日本人間関係学会 編 『人間関係ハンドブック』

希薄化が進む現代社会の人間関係。その危機からの回復や人間関係の創造に寄与することが期待されている。

日本人間関係学会が認定する「人間関係士」。今後さらに注目が集まる「人間関係士」の取得を目指す人に必携の1冊！

B5版・並製 280頁 3,800円＋税
発行：福村出版 発行年：2017年

人間関係学探訪シリーズ⑦

日本人間関係学会は教育・医療・心理・福祉など研究者だけでなく、人間関係に関心のある企業人、学生、市民など多種多様な会員が集まっています。そうした会員のお一人おひとりにスポットを当てて、Q&A形式で、その実践やお人柄、人間関係への想いを語っていただき、人間関係学の探究に何らかの示唆を得ることが本シリーズの意図・ねらいです。シリーズの第7回では、埼玉学園大学大学院教授の小山 望先生に語っていただきました。

小山 望 氏



岩手県出身。筑波大学大学院博士課程心身障害学専攻修了。臨床心理士、博士（社会福祉学）、人間関係士、国立総合児童センター（こどもの城）心理相談員、埼玉県立衛生短期大学助教授、東京理科大学理工学部教授、同大学院科学教育研究科教授を経て、平成26年より埼玉学園大学大学院心理学研究科教授、平成29年より埼玉学園大学人間学部心理学科長、その他公立高校のスクールカウンセラー、精神科クリニック、EAP（フィスマック）のカウンセラーを歴任。平成23年より日本人間関係学会理事長～現在に至る。平成23年より現在まで被災地の南三陸町に地域の住民のコミュニティづくりの支援活動を継続的に行う。家族は子どもが一男一女。現在は、妻と愛犬バルとの3人暮らし。趣味は犬の散歩、テニス、蕎麦が好き。

谷川（広報委員会）：こんにちは、小山 望先生。学会ニュースの「理事長ご挨拶」などでいつもお世話になっていますが、今回は「探訪」取材のご依頼を快くお引き受けくださり、感謝を申し上げます。どうかよろしくお願いいたします。

小山：こちらこそよろしくお願いいたします。

谷川：さて、小山先生のご経歴を教えてください。

小山：生まれは岩手県ですが、宮城県仙台市で小学校・中学校・高校を過ごしました。大学から東京です。青山学院大学で、臨床心理学を学びました。卒論の先生が東京教育大学（現筑波大学）の出身でしたので、大学院は筑波大学を勧められ、受けました。大学院では、知的障害や自閉症など発達障害の相談に取り組んでいました。筑波大学病院の臨床実習もありました。大学院を出て、旧厚生省の国立総合児童センター（青山のこどもの城）の心理相談員として子育て相談、発達相談をしていました。その後は短大や理系の大学で心理学やカウンセリング論の教員をしています。

谷川：小山先生のルーツ、それにキーワードとして「相談」があると感じました。次に、先生のご趣味は何ですか。

小山：趣味は愛犬バルの散歩です。毎日バルに癒されています。犬を飼ってから、近所の人と知り合う機会が増えました。マンションの管理組合の役員をして、さらに付き合う仲間が増えました。犬を飼って人との付き合いの幅が広がったことは予想外の楽しさです。

谷川：愛犬バルとの散歩で人との交わりが広がっていったという、素敵なエピソードですね。癒しのバル(^)。ところで、先生はこの学会には初期の頃から関わっておられるようですが、きっかけは何だったのでしょうか。



小山：きっかけは、初代本学会会長である埼玉大学の故・茨木俊夫先生に声をかけられたことです。第2回大会を埼玉大学で引き受けて、国立婦人会館で開催したときに、大会実行委員会のメンバーになったことが始まりです。次に茨木先生に依頼されて第11回大会（2003年）を東京理科大学で引き受けることになり、大会委員長として大会の運営に関わって以来、本学会とは深く長い付き合いとなりました。茨木先生とのご縁を通じて、佐藤啓子先生や様々な分野の先生と交流ができました。それが私の財産になっています。

谷川：そうして先生の今日における学会の人脈づくりが始まったんですね。

小山：はい、人間関係のつながりは大切です。

谷川：今の学会活動につながっていますね。ありがたいことです。そして、先生は、埼玉ロールプレイング研究会を主宰されておられます。どのような会でどんな活動をされているか少し教えていただけますか。

小山：ロールプレイング研究会は、東京理科大学にいますときから始めてもう20年くらいになります。ロールプレイング（サイコドラマ）は楽しさ、解放感に溢れ、人間関係を捉えなおすヒントが詰まった有効な心理療法のスキルですので、色々な人に経験していただきたい。ロールプレイングの恩師は筑波大学名誉教授の台利夫先生です。一昨年から山梨ロールプレイング研究会と合同で宿泊研修会を行っています。本学会も共催しています。

谷川：埼玉ロールプレイング研究会は学会との共催で合宿研修をするなど精力的ですね。先生は他にもフィールドを持たれ、積極的に活動されていることがおありですね。

小山：はい、南三陸町への継続的なコミュニティづくりの支援活動です。学会の支援活動委員会を立ち上げて、6年間継続しています。今年も夏に行ってきました。私は動きながら考えるタイプで、ロールプレイングと同じアクションアプローチです。議論ばかりして実際に問題に向き合い活動しないのは無責任です。研究者は議論好きが多く、議論自体が学会活動と勘違いしています。時間を区切って議論し、進めていく必要があります。

谷川：静と動のバランスが大事とも言えますね。今後の学会の方向は？

小山：まず人間関係士の資格制度の普及です。短大、大学での養成、社会人にも広めたい。次に人間関係のスキルを結集した本を学会から出版したい。また人間関係士は、確かなスキルがあってなんぼ。スキルを研鑽できる場を学会として用意したい。

谷川：人間関係力の向上のためにも重要ですね。では、最後にもう1つだけ。人間関係、こうすれば良くなりますよという何か提言なり提案はございませんか。

小山：人との関係を育むのは、話題の豊かさ、面白さ、スキルだけではなく、感情、ハートです。まず相手を受け入れ感情の交流が起きる温かい気持ちがあってこそです。

谷川：ゼミの院生さんたちにも先生の“あったかいこころ”が浸透されています。相手があってこそその自分、これからも磨いていきたいものです。本日はタイトなスケジュールの中、心のこもった貴重なお話をどうも有り難うございました。

（インタビュー：2017年8月6日）



《事務局便り》

- ✓ **会員状況** (8/31現在)
229名 (内訳：正会員 198名、準会員 29名、賛助会員 2名)
- ✓ **新入会員** (2017/5/26～2017/8/315)
6名 (内訳：正会員 4名、準会員 2名、賛助会員 1名)
- ✓ **新入会員紹介** (順不同・敬称略)
石川 和美、渡辺 美奈子、勝田 みな、風間 みえ、中尾 浩康、伊藤 道明
- ✓ **退会者** (2017/5/26～2017/8/31)
3名 (内訳：通常退会者3名、会費未納等による退会者0名)
- ✓ **事務局からのお願い**
住所・連絡先・会員身分など変更のある方は、至急、事務局まで
jahrjimukyoku@gmail.com FAX:048-299-1111
- ✓ **会費納入について**
2017年度会費請求は、正会員の会費改定、一般会員枠の追加などとの関係で、
全国大会総会後 (11月下旬) となります。追ってお知らせいたします。
- ✓ **メールアドレス登録のお願い**
現在、事務局では HP リニューアル等様々な情報配信につきまして、見直しを行っております。
「学会ニュース」などもメールマガジンによる配信に移行できるように準備を進めております。
追って会員各位に連絡をいたしますが、メールアドレスの登録を全会員の皆様にお願いをしたいと
考えております。 郵送費などの経費も節減する必要からご理解・ご協力をいただければ幸いです。
会員の皆様で、メールアドレスの登録がまだの方 (または、アドレス変更連絡をされていない方) につきましては、事務局までご一報願います。

《南三陸町への支援活動委員会 キャンパのお礼とご報告》

- ✚ 2017年5月14日および8月6日の理事会の開催時に、南三陸町への支援活動委員会に対して
多大なるカンパをいただきありがとうございました。
- ✚ 下記に寄付をいただいた常任理事、理事の皆様のお名前を明記させていただきます。
- ✚ 早坂三郎、勅使河原隆行、杉本太平、内城喜貴、山中康平、遠藤正博、田中典子、若杉博雄、濱島淑
恵、鈴木満、杉山雅宏、佐々木美恵、北爪あゆみ、布施雅子、河合高鋭、小山望 (敬称略・順不同)
- ✚ 集まったカンパ金額 32,900円。
- ✚ 今回の支援活動(宮城県南三陸町) は、8月27日から8月29日までの3日間、南三陸町細浦地区住
民との交流会、津波体験とその後の復興について被災地の住民から学ぶ (高橋長泰氏)、南
三陸町立病院・地域包括支援センター所長 工藤初恵氏との意見交換会などを実施しました。
- ✚ 支援活動委員会のメンバーは、杉山雅宏、武井明美、鈴木満、阿部暢夫、小山望、同行メンバー
は埼玉学園大学大学院生・学部生 (小山ゼミ) 6人でした。集まったカンパ金は、現地でのレンタ
カー代、ガソリン代、お土産代などに使わせていただきました。機会を改めて会計報告します。

理事長 小山望

(編集後記)

第91号をお届けします。早いもので2017年も秋がやって来しました。実りの秋とはよく言われるところですが、その一つ《人間関係ハンドブック》の特集 (その2) を今回は組ませていただきました。読み応えはいかがでしたでしょうか。2回続けての特集を組むことで、本書出版の意義や願いがより深く確認できるものとなりました。今回も、小山理事長はじめ記事協力いただいたすべての方々に感謝を込めて御礼申し上げます。(谷川)